

切花・花き球根の輸入動向と植物検疫

最近、生活に潤いと安らぎを求める気運の高まりに伴い、“花”の消費が年々増大しており、海外からの切花や球根類の輸入が増加している。これらの植物は航空輸送網の整備により、短時間でしかも大量に輸送され、それらに病害虫が付着して直接国内に持ち込まれる機会も増大しており、植物検疫の重要性がより一層高まっている。

輸入状況 切花と球根の最近5年間の輸入量の推移はグラフに示したとおりである。

切花の輸入量はこの5年間で約2.2倍に増加し、平成2年の輸入量は約3億5千万本となっている。

輸入された主な切花はタイ、シンガポールからのラン類が34%を占め、アメリカ、コスタリカからのシダ、ペーグラスの切葉類、台湾からのキク、オランダからのユリ、フリージアなど上位6種類で70%以上を占めてお

り、生産国は68か国、種類は200種以上に及んでいる。

一方、球根類の輸入量も近年大幅に増加しており、平成2年には約1億6千万球が輸入されている。その内訳はチューリップが7千万球、ユリが5千7百万球で、この2種類で輸入量の80%を占めており、その他ブラジオラス、ヒアシンス、ス

イセンなどである。これらの球根の90%以上はオランダからのものであり、この要因は、昭和63年から平成2年にかけて同国産のチューリップ球根とユリ球根の一部主要品種が隔離栽培免除となったためである。この制度の導入により、次のような変化がみられるようになっている。

①これまで主力だった増殖用のほかに切花用、直

販用としての球根が大量に輸入されるようになったこと。

②輸送期間の短縮及び品質保持のため、従来の海上コンテナから航空コンテナに輸送方法が切り替わってきたこと。

③国内の球根生産地の園芸業者が産地と至近距離にある地方空港へ直接輸入するようになってきたこと。

④ユリ球根が切花用として凍結状態で周年輸入されるようになってきたことなどがあげられる。



オランダのチューリップ栽培風景

植物検疫の現状 切花の検疫については、鮮度を保つため、輸入関係者や輸出国から迅速な検査が求められている。このような状況の中でオランダ産切花については、同国において検査を実施できる体制、施設などが整備されていることから、わが国の植物防疫官を周年2～3名派遣して輸出前に検査を済ませ、日本到着時の検査を簡略化する

輸出前検査制度を昭和60年から導入している。

輸入切花から発見される害虫は、アザミウマ、アブラムシ、ハダニなどの微小害虫が多く、時にはキンケクチブトゾウムシ、フラーパラゾウムシ、ジウイチホシウリハムシのようにわが国で特に侵入を警戒している特定重要病害虫(本誌20号参照)が本来の寄主でない植物の梱包内にヒッチハイクしているのが発見されることもある。

これまでに、発見されたアザミウマは60種以上が発見されており、このうちの半数は本邦未記録種である。

一方、球根類の検疫は、輸入港での病害虫検査のほか、港では検査のできないウイルス病などを検査するために一定期間隔離栽培を受けることが義務づけられている。

隔離栽培が免除されているオランダ産球根については、同国検査機関によるELISA検査、栽培地検査およびわが国植物防疫官による栽培地検査を実施し、これに合格した球根であることなどの

条件が付されている。

現在、隔離栽培が免除されている球根は、チューリップ180品種、ユリ104品種、ヒヤシンス6品種、およびアイリス7品種である。このほか特殊容器

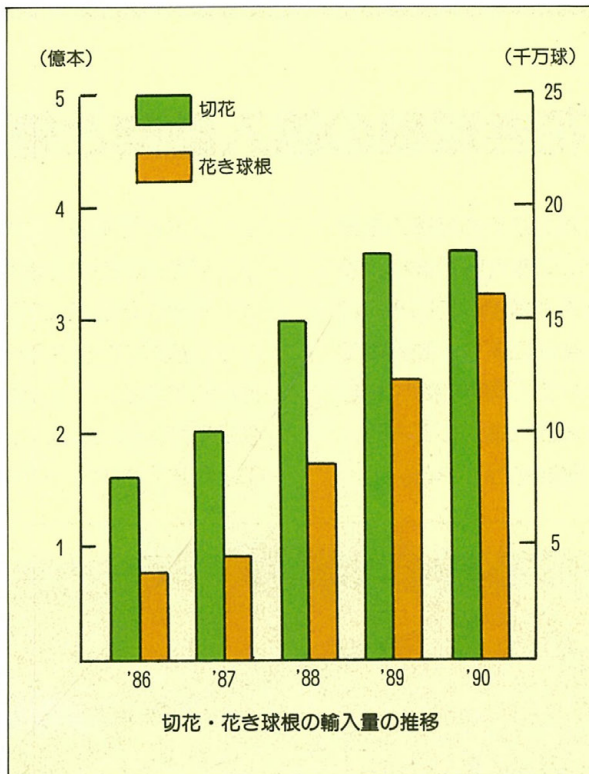
に封入され、消費用球根として輸入されるヒヤシンス、アマリリスについても隔離栽培が免除されている。

球根類の輸入時の検査では各種の糸状菌病のほか、スイセンハナアブ、チューリップサビダニ、チューリップネアブラムシなどが発見され、また隔離検査では球根の種類ごとに特有のウイルス病のほか、ヒヤシンス黄腐病、チューリップかいよう病などの細菌病も発見される。

植物防疫所では、海外からの病害虫の侵入を防

止するため検疫現場では慎重かつ精密な検査を実施している。

また増大する切花及び花き球根類の輸入検疫を的確かつ迅速に実施するため、検疫技術の開発・導入にも積極的に取り組んでいる。



切花の検査風景



港での球根検査風景